

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	所 木綿子
論文題目	19 世紀アルジェリアにおける他宗教理解の試み ーイスラーム知識人アブドゥルカーディルのキリスト教徒観を中心にー		
(論文内容の要旨)			
本論文は、19 世紀の著名なイスラーム思想家・活動家、アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリー（以下アブドゥルカーディル）の生涯と思想の分析を通じて、彼の他宗教理解（とりわけキリスト教理解）を明らかにしようと試みるものである。彼は、イスラーム世界の植民地化が進行する 19 世紀において、フランスの植民地支配に対する武装闘争を指導したことで有名であるが、これに敗れた後は、フランスの年金を受け取り、キリスト教徒フランス人らと積極的に関わりを持ち続けた。こういった二面性を持つーイスラーム知識人のキリスト教理解・キリスト教徒理解が、本論文の対象である。本論文は、3 部 8 章と序論・結論から構成されている。 第 1 部は、本論文の時代背景について述べる。第 1 章では、アルジェリアについて、フランスによる植民地支配と諸キリスト教団体による宣教活動を中心に叙述する。伝統的にムスリム優位の状況の下で諸宗教が共存していた同国において、19 世紀の植民地化によって、フランスの圧倒的な軍事支配と結びついたキリスト教が「文明化の使命」を標榜し、イスラームが劣位に置かれる状況が生じたことを明らかにしている。 第 2 章は、アブドゥルカーディルが後半生を送ったブルサとダマスкасを中心に、オスマン朝の 19 世紀の状況について述べる。ここでは、長期に渡り安定した支配を築いてきたオスマン朝が、ギリシャの独立、1830 年のフランスのアルジェ支配により徐々に弱体化していく様子が描かれる。この西欧の支配は、軍事面のみならず、政治、経済、文化の諸側面においても、オスマン朝の人々の価値観を揺るがすものであった。 第 2 部は、アブドゥルカーディルの生涯を叙述する。第 3 章では彼の生涯を、フランス軍に対するジハード (1832-47 年)、敗北とフランス内での拘留 (1847-52 年)、ブルサとダマスкасにおける東方での生活 (1852-83 年) という三つに区分してたどっている。筆者はその生涯を、フランス軍に対するジハードを行い敗北し、拘留されるという体験を経たアブドゥルカーディルが、拘留後は自らの信条であるイスラームを守りながら、西欧やキリスト教徒との関係性について、最善の道を模索していたと分析する。 第 4 章は、彼がその生涯において何度も行ったフランス人との議論に焦点を合わせる。現代フランスなどにおける宗教間対話の先駆といったアブドゥルカーディル評価とは異なり、フランス人聖職者らとの議論は、イスラームとキリスト教との間で伝統的に行われていた論争史に位置づけられるものであり、自らの信条を擁護しながら相手の宗教信条を一方的に批判する様相を呈していたと結論づける。 第 3 部は、アブドゥルカーディルの思想におけるキリスト教観・キリスト教徒観を			

論じる。第5章では、アブドゥルカーディルの著作の内、書簡資料を取り上げて、フランス側に対して彼が自ら積極的に意思疎通を図ろうとしていたことを論証する。それは、降伏したフランスに対する政治的服従の必要性からだけでなく、キリスト教徒に対する親愛の情を表明する意図もあったことを明らかにしている。

第6章は、キリスト教世界と重ね合わされることの多い西欧社会に対する彼の認識について検証し、西欧優位の社会状況の中でイスラームを正しく遵守するという認識があったことを示す。

第7章は、アブドゥルカーディルの他宗教理解について検証し、おおむね中世のイスラーム思想家の見解を踏襲する伝統的なものであることを明らかにしている。

第8章においては、イエス=キリストとキリスト教徒に特化する形で、アブドゥルカーディルの考えを検証する。キリスト教への伝統的理解にもかかわらず、キリスト教聖職者との間の宗教的な内容の議論からは、むしろ実際のキリスト教聖職者の信仰についての積極的な知的好奇心を見て取ることができると結論づける。

以上に基づき、アブドゥルカーディルのキリスト教・キリスト教徒観においては、前者が伝統的な観点に沿って理解されるべきであるのに対し、後者は、彼自身の体験を踏まえた関係性のうえに構築されたものであり、この両者を区別して論じる必要があると結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、イスラーム世界の植民地化が進行しつつあった 19 世紀アルジェリアにおいて、反仏武装闘争を指導したことで広く知られるアミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリー（以下アブドゥルカーディル）の他宗教理解を、キリスト教を題材に追求するものである。アブドゥルカーディルは、上述の武装闘争をジハードの名のもとに行ったが、後に降伏し、フランス国内に拘留されることとなった。その後、オスマン朝内のブルサとダマスカスに移住することとなるが、この間彼には、豊富な年金がフランス政府から与えられ、言論の自由も保証されていた。彼の生涯は、フランスとの敵対とフランスによる庇護・フランスとの対話との間を揺れ動いたものだったと言える。イスラームの聖戦（ジハード）を唱えた彼が、キリスト教やキリスト教徒の代表としてフランスやフランス人をとらえたのは、当然のことであった。ここに、申請者が彼のキリスト教観・キリスト教徒観に注目する理由がある。

本論文の学問的貢献は、以下の三点に集約することができる。

学問的貢献の第一は、これまで十分に利用されてこなかった資料を博搜していることである。彼はその生涯に多くのアラビア語の著述を遺しているが、同時にフランス人宣教師らとの間に、膨大な書簡のやりとりをしていた。申請者は、フランス（パリほか）・アルジェリア（アルジェほか）・トルコ（ブルサ）・シリア（ダマスカス）の文書館・図書館を細かく調べ、これまでの研究者がきちんと吟味してこなかった書簡類を子細に検討している。

学問的貢献の第二はこれに関係するが、彼の遺した書籍と、フランス人との間に交わした書簡との間の論調の差を浮き上がらせたことにある。前者においては、彼は伝統的イスラーム学に則った思想を展開している。すなわち、キリスト教はイスラームに先行する啓示宗教であるが、イスラームには劣る存在だということになる。他方後者においては、アブドゥルカーディルはアンビバレントな記述を遺している。生身のフランス人宣教師たちとのやりとりの中で、彼は時にはキリスト教徒を称賛し、時には彼らの信仰心の薄さをなじる。彼のキリスト教観は、主としてその著作に表れており、それは自らの受けてきた伝統的教育から生み出されているがゆえに、一貫している。これに対して、目の前のフランス人＝キリスト教徒たちとの対話は、彼のキリスト教徒観に一定のゆらぎを与え、そのことが、彼らに対してどうふるまうかにも影響していくこととなった。そのことを、二種類の資料を同時に、しかし対比的に用いることによって、活写している点がすぐれている。

学問的貢献の第三は、現在フランスで広がりつつある、宗教間対話の先駆者としてアブドゥルカーディルを位置づける傾向と一線を画す形で、客観的に彼の位置づけを分析している点にある。フランスでは、かつてジハードを行いながら、後に「フランスの友」となったアブドゥルカーディルを顕彰する機運が強く、政治界・宗教界のみならず、学問の世界でもこういった見方が日増しに強くなりつつあるように見える。

しかしながら、現在の宗教間対話と、19 世紀のキリスト教・イスラーム間論争とを同一線上に並べて見ることは、学問的には疑義がある。申請者がこの点に関して、最近のブームから一步身を引いて検討を加えている点は、本論文に学問的信頼を増すものとなっている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 1 月 11 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。